

Judith Wright の詩と Pioneer Women (4) Judith Wright の死と Wright 家の没落

Judith Wright's Poems and Pioneer Women (4) Judith Wright's Death & 'the fall of dynasty'

(2001年3月31日受理)

橋内幸子
Hashiuchi Sachiko

Key words : Judith Wright, Pioneer women, オーストラリア性

I. はじめに

Judith Wright は、新しい世紀を迎える前年の2000年6月25日に、首都キャンベラで、85才の生涯を閉じた。オーストラリアの自然と人間をテーマに選び、詩を中心に表現活動を長年続けてきた女流作家の死は、翌日のメディアを通じて、哀悼の意を込められて報道された。その一生は、単なる「言葉の可能性を追究した芸術家」の人生ではなく、勇気ある主張に裏づけられた広範な活動の生涯であったといえる。表現者としては、他の大陸では目にすることのない鮮やかな色彩にあふれた自然と動植物を、彼女の詩の中で、人間に劣らないほどの存在感を持たせた。その美を文字の形に定着させ、人間の生活に沿ったものに転化させたのである。一方、さまざまな問題と矛盾の歴史を持つオーストラリアに生きる人間として、誠実に良心の命じるままに思考を重ねた結果、彼女は闘いの姿勢を崩さなかった。祖先が移民として、当局から譲り受けた土地は、原住民アボリジニーから取り上げたものであった。白人が彼らを虐殺し、追放した歴史は、詩人の心から消えず、アボリジニーの権利のために闘いを続けることになったのである。また、現代社会が工業化を進めたために、大規模な環境破壊が引き起こされたことを憂慮した Judith Wright は、熱心な自然保護活動家であった。いずれも、広い意味での「生命」を第一義とする価値観に従った一人の人間の軌跡である。

しかし、その Judith Wright の実家では、同年、破産という悲劇を迎えていた。裕福な牧畜業者として、長年ニューイングランド地方で大規模な 'station' (牧場) を保有し、地方の名家になっていた、その家が、である。1896年、Charlotte May Wright は、未亡人となっていたものの、危機を乗り越え、さらに近隣の土地である Wallamumbi を購入した。この、Judith Wright の祖母にあたる人物が、銀行に融資を依頼し、大牧場経営の基礎を固めた。そして、その彼女の息子、つまり、Judith の父 Phillip が、事業を引き継ぎ、ニューサウスウェールズ州の牧畜業協会の会長、

ニューイングランド大学の総長、国立公園建設の中心人物、などの名士として、一家の名前を高めた。Judithは、そのPhillipの最初の妻の子供であった。そして、破産したのは、二番目の妻の子供である、David Wrightであり、一家の中で、最も野心家といわれていた人物である。

家は、人間同様、生まれ、栄え、滅んでいく。ちょうど、2000年12月末にJudith Wrightの生まれ故郷の地Armidaleに行く機会を得た筆者は、さまざまな知人のおかげで、Judith Wrightゆかりの場所を見学し、新聞の死亡記事や追悼の記事をはじめ、Wright家についての情報を入手することができた。そこで、本稿では、これらの原資料や、Judith Wrightが最晩年に出版した自伝、*half a lifetime*(1999)を参考にしながら、彼女の詩のバックボーンとなったものへの接近を試みることにする。Judith Wrightの伝記は、Veronica Bradyによる*South of My Days*(1998)もよく知られた名著であり、BrisbaneのQueensland大学のbookshopのショーウィンドウにも置かれていた。Bradyの著作が、どちらかというと批評的視点もあるアカデミックなものとしたら、詩人の自伝は、編集者がいたものの、語り口調の、親しみやすいトーンで表現された半生記である。さらに、続編を期待できないのが、非常に残念である。

II. Judith Wrightの死をめぐって

1. 2000年6月26日の死亡記事を中心に

Judith Wrightの死について語る前に、詩人の晩年について知っておく必要がある。キャンベラで送った人生の最後の日々には、詩を書くという試みはあまりなかったようである。2000年12月26日に訪問した、Judithの親戚の一人は、「Judithは、年老いて耳が遠くなった時からは、詩は書いていません。詩は、聞いて楽しむためのものだから、と、彼女は言っていたわ。聞こえなくなったら、その楽しみはなくなるから。でも、彼女は、幸せな人だった」と語った。‘幸せな人’という表現には、さまざまな意味が込められていたと判断するのは、うがった見方であろうか。裕福な家に生まれ、視覚と聴覚に感じとれる美を言葉に定着させる能力を持っていた人間。自分の信じることを、行動に移せることができた強い人間。一種のメンターともいえるパートナーに出会い、子供も持った人間。普通の人間にしてみれば、羨望の思いも浮かんでこようものである。

それでは、Judith Wrightの死について、メディアはどのように報じたのであろうか。2000年6月25日の*The Sydney Morning Herald*の死亡記事欄には、‘White woman, black soul’という見出しのもとに、Judith Wrightの死が報じられた。イギリスからの移民を祖先に持った白人でありながらも、アボリジニーの魂を持った女性、という標題が示すように、彼女の全人生は、アボリジニーの存在に象徴されるあらゆる事物に関連していた。オーストラリアの自然の素晴らしさも、環境破壊の脅威に直面している自然も、全てアボリジニーの境遇に符号しているのである。

Judith Wright, who loved the Australian landscape with an intensity, perception and passion that was almost Aboriginal and who celebrated that love in poetry

both exact and sensuous, died in Canberra Hospital last night. She was 85.¹⁾

さらに、祖先がアボリジニー達を追放し、その土地を奪ったために、彼女は一生涯消えることのない罪悪感と、どこにも帰属する場所はないという感覚を持ち続け、それを詩と散文のメイン・テーマとしたと、紙面は続いている。つまり、ニューサウスウェールズ州の北部の台地（生まれ故郷の地、Armidale）にも、精力的な創作活動の拠点であったクィーンズランド州の海岸に沿った丘にも、そして、死を迎える数年前まで住んでいた、キャンベラの南を流れるモンガーロウ川沿いの原野に建てた住まいにも、であった。

このような、疎外感と略奪者の子孫としての罪悪感のありようとして、記事には、詩（“Eroded Hills”）と小説（*The Cry for the Dead*）の一節が引用されている。いずれも、土地に関する白人達の搾取に関わった事柄についての苦渋に満ちた思いがつつられている。しかも、その土地こそ、彼女が生まれた家、つまり、裕福な牧畜業者でこの地に長らく定住していた一家の所有地であった。Judith Wright は、1915年5月31日、母方の家である Thalgarrah Station で生まれた。Judith が自伝にも写真とコメントを載せているように、この地は彼女のお気に入りの場所であった（Thalgarrah: with its gracious, sunlit rooms, its rushing clear river and its tree-edged lake, I love this property the best.²⁾）。彼女は、祖母の May が事業のための拠点とした Wallamumbi で育ち、地元の Armidale にある New England Girls' School で教育を受けた。Thalgarrah も Wallamumbi も、現在は、全く Wright 家とは無関係の人々が住んでおり、近くの牧草地にも、'station' といいながら、2000年12月末の時点では羊や牛の姿はほとんど見られなかった。この点についての経緯については、次章で述べたいと思う。そして、New England Girls' School も、ちょうどクリスマス・シーズンであったため、学内には人の姿も見えず、夏の陽射しに焼かれている建物全体も静まりかえていた。窓の外から見える教室の内部には、生徒達の絵や作品が壁に掛けられたり、学習活動の様子を写した写真が窓ガラスに貼られてもいた。南半球で過ごす真夏のクリスマス・シーズンは、北半球に住む人間にとって、大いに違和感のあるものである。しかし、生徒達の作品を外から見えるように、カーテンも開けたままにしているのは、いかにも開放的なオーギーらしさと思われた。

次に、記事には、先住民の土地を奪った、当の白人の家系に属する事実、しかも、移民達はその土地に描いた理想は、遠いイギリスの風土であったことが、いかに彼女の良心に反するものであったかが述べられている。

Her bitterness and anguish broke through when once she spoke of white Australian settlers: “We’ve got no history, no roots and no liking for the place. From the earliest years we’ve been fed with a picture of an English landscape as home.”³⁾

この思いを抱きつつ、Judith Wright は、シドニー大学で学び、詩を発表していった。詩の他に、

開拓者としての祖父母の姿を描いた *The Generataions of Men* (1959)、数冊の児童文学作品、エッセイなども含めると、その執筆活動は旺盛であったといえる。長年の成果に対しては、さまざまな賞が授与された。ブリタニカ文学賞 (the Britannica Award for Literature) を始め、クィーンズランド大学やニューイングランド大学からは、名誉文学博士号などが授与され、その華々しい経歴が示されている。しかし、その姿勢の根底には、常に、オーストラリアの歴史が示す負の局面への視点があった。そのため、彼女は常に、政治の動きに注目し、アボリジニーの権利回復への活動を続けた。また、その視野には、この国が抱える新しい問題点である環境破壊を引き起こす開発への批判と、自然保護運動への賛同が加わっていった。1962年、彼女は、クィーンズランド野生生物保護協会 (The Queensland Wildlife Preservation Society) を設立する。また、グレイト・バリアー・リーフでの原油採掘反対運動に深く係わり、フレーザー島などの砂の採掘にも反対した。人間の都合によってのみ、自然を破壊することの愚かしさは、自然とともに生きてきたアボリジニーへの不当な扱いに通じているからである。

Judith Wright 自身の個人的な事柄にも、変化は起こっていた。夫である哲学者の Jack McKinney が、1966年他界し、娘の Meredith は、日本文学の研究者、翻訳者となっていた。1975年、Judith は、住み慣れたクィーンズランド南西部の Tamborine の高地にあった住まいを去り、首都キャンベラの南、Braidwood の近隣の遠隔地に居を移した。そこで書かれたのは、1840年代から1920年に至るまでのクィーンズランド中央部で起こった、アボリジニー抑圧の歴史、*The Cry for the Dead* (1981) であった。その悲惨な事実を描写したこの本に対して、記事は次のように述べている。

Her story of the white man's destruction of the environment and its original and rightful inhabitants, said a reviewer for this newspaper, had been told "with a power and fullness of detail that have seldom been equalled in Australian literature."

Reading *The Cry for the Dead* made it easier for many people to understand the difficulty Judith Wright had experienced in recognising the ownership of her family's land.⁴⁾

この作品は、その土地の正当な所有者であるアボリジニーを虐殺し、開拓と開発という大義名分のもとに、太古からの自然と環境を破壊した白人の蛮行に対して、その白人に属する者から告発したものである。しかも類を見ない程の圧倒的な詳しい描写にいたる背景には、Judith Wright 自身の家の問題、つまり、アボリジニー達の土地を奪った白人の家に生まれたという苦しみがある。

このように、Judith Wright は、キャンベラという政府機関が集中している場所であって、政治的発言を続けた。しかし、彼女は、詩人である。自然に囲まれた住まいで一人、詩作にも心を傾けた。1985年、詩集 *Phantom Dwelling* と *We Call for a Treaty* を出版した。出版した際のコメント

には、詩人が持論とする、詩についての主張がある。

“To me poetry has always been a way of finding out where I stood in the matter of relationships and feelings. And attempting to put it into words to convey those feelings to others. That’s what poetry ought to be, I reckon.”⁵⁾

つまり、彼女にとって、詩とは、ある事柄について自己との関係、及び引き起こされる感情を見極める方法として意義を持つものであり続けてきたのであり、それらを文字にして、他の人間に伝えることであった。そして、この死亡記事は、出典は明記されていないものの、1953年に出版された詩集 *The Gateway* の同名の詩からの一節で終わっている。

In the depth of nothing

I met my house.

All ended there;

Yet all began.

All sank in dissolution

and rose renewed.⁶⁾

この詩は、死者が通る門をくぐった旅人が語るモノローグから成る構成で、プライドを持って生きてきたその旅人が全てを失い、最後のよりどころであった自己 (Self) さえもなくしてしまう。しかし、その完全な無の中に、再び ‘家’ といえるものに出会う。‘家’こそ、全てが終わるところ、しかし、また全てが始まる場所である。Judith Wright にとって、オーストラリアの開拓移民であった家族の家こそ、全ての意識と活動が始まったところであり、帰るべきところである。絶えず立ち帰り、そして、出ていく場所であり、その度に ‘家’ は意義を変えていく。

2. 2000年9月16日の ‘埋葬’ についての記事より

2000年9月16日の *The Sydney Morning Herald* 紙には、80日前に死亡した Judith Wright の埋葬についての記事が掲載されている。記事を書いているのは Greg Roberts で、見出しには ‘In death, parted lovers reunite: Wright and her dear philosopher’ と書かれている。‘埋葬’ の場所は、クィーンズランド州ゴールドコーストの後背地になる Tamborine の丘である。そして、二人の間の子 Meredith が、父の Jack の墓のそばに座っている写真も並んで載せられている。彼女は、母 Judith の生前の願い、つまり、夫 Jack の墓の付近での散骨をするために、彼らの思い出の地に足を運んだのである。記事によれば、まず、二人の結婚が理想的なものであったことがわかる。

“You could say that my mother was married to my father very thoroughly,” says Meredith, who teaches Japanese at the Australian National University.

In accordance with her mother’s wishes, Meredith scattered Wright’s ashes around the cemetery on Tamborine Mountain, where her father is buried.⁷⁾

この亜熱帯の熱帯雨林地帯に属する Tamborine Mountain にあった彼らの家、Calanthe での生活こそ、Judith Wright が Jack と共に最も楽しい思い出を作ったと、Meredith に語った場所である。詩人の夫になった Jack は、彼女より23才年上の哲学者で、Judith の詩作に最も大きな影響を与えた人物である。この二人は、第二次世界大戦直後、クィーンズランド大学で出会った。Judith は、この大学で統計関係の事務官をしており、Jack の人間性や価値観に自分と同じものを見い出した。特に周囲にあるものの意味や色彩に敏感な感受性を持っていたことは、Judith も自伝で述べている事実である。その Jack も、1966年に74才で死に、Tamborine に葬られている。記事には、死と埋葬に対する Judith の思いを示すために、詩人の詩の一節が引用されている。出典は、1963年に出版された詩集 *Five Senses (The Forest)* に収められた長編詩、“The Morning of the Dead” から、III. The End の部分である。

Time’s not for weeping.

Time and the world press on. So take life further,
let the thin bubble of blown glass, the passion
of vision that is art, refine, reflect and gather
the moving pattern of all things in consummation
and their rejoicing.⁸⁾

死者は、その死でもって、生きている者に対して教示するものがある。生まれ、消滅していく、あらゆるものの動く構図を知っておくようにと。

クィーンズランド州は、Judith Wright が、環境保護運動を精力的に実行したところである。現在、オーストラリア独自の自然の宝庫や美が残っている場所は、保護か工業化、観光開発かのいずれかに州の方針が傾くことが多いものである。クィーンズランド州は、保護より、資源の活用と観光開発の方を選択した。Judith Wright は、その方針に対して、真っ向から反対の姿勢をとり、反対運動を続けた。クィーンズランド野生生物保護協会の現代表であり、Judith の友人であった Jan Oliver は、彼女の功績を次のように語っている。

“To a country that had been slow to recognise the importance of its fragile lands and ancient, indigenous culture, Judith brought passion, eloquence and, most importantly, change.”⁹⁾

詩人が、この意義ある運動から身を引き、遠く離れたキャンベラに居を移したのは、当時の州知事であった Bjelke-Petersen の施策が、ことごとく彼女の意思に反していたからである。その対立は激しく、後にまで尾を引いている。記事によれば、クィーンズランド大学が、彼に名誉博士号を授与した時、Judith は以前に授与された名誉文学博士号を返還している。一方、当の前知事は、まだ存命であり、記者のインタビューによれば、当時の対立のままの心境でいることが明確である。なにを第一義に考えるかは、その人間の価値観により、非常に異なるが、利害が絡むと、その対立は収拾のつかない場合が多い。これも、不変の human pattern であろうか。

III. The Wright family の没落

2000年12月末に、知人が用意してくれていた資料は、文学関係の批評書では、とうてい計り知れない事実を述べているものであった。ニューイングランド大学の図書館の司書から手渡されたコピーという資料は、Judith Wright の実家の没落の経緯を詳細に説明したものであった。Richard Guillatt の取材による資料は、*Good Weekend* の2000年7月15号からである。

この資料は主として、Judith Wright の異母弟 David Wright を中心としたものである。広大な土地を牧畜業用に開拓した Wallamumbi を始め、全ての財産を失うことになったいきさつは、オーストラリアの第一次産業のありかたも含めて、興味深い。ルポルタージュ風に描かれていく、その記事の冒頭には、今から百年前のエピソードが書かれている。1896年の春、David の祖母にあたる41才の May が、ニューサウスウェールズ州の北西部の高台から、緑の木々が繁茂する森や丘を眺めているところから、話は始まっている。夫を六年前に亡くし、三人の子供を育て、主力銀行からの莫大な借金をしている、その未亡人は、さらに、牧畜業の拡大を図って、近隣の土地の購入資金を借入れることを決心するのである。これが、現在の Wallamumbi の土地である。その時、彼女の頭には、これから先の危機、例えば、牧畜業関係の物価の下落や干ばつなどを思う余地はなかった。この当時の一家の様子は、Judith Wright の *The Generations of Men* に詳しく描かれている。David の破産の経緯と比較すると時代の差が判然としていることがわかる。特に異なる点は、顧客のローンに対する銀行の態度であろう。現代的な経営論理を旨とする銀行は、顧客よりも安全な資金運用の方を信頼するものである。

“Fall of a dynasty” と題された、この資料によると、ANZ Bank からローン返済の催促状が届いた日から、破産宣告に至るまでの、双方の考えの食い違いは明白であった。

The legal process that began on that day culminated in April this year with a court judgment that financially destroyed the Wrights, one of Australia's most venerable grazing dynasties. In a unanimous decision, the NSW Court of Appeal upheld a judgment which had ordered the Wrights to pay the ANZ more than \$40 million, including costs. In court over the previous two years, the family had

accused the ANZ of unconscionable conduct and negligence; the bank, in turn, had accused the family of financial incompetence.¹⁰⁾

最終的には、莫大な借入金を返済するために、全ての財産を売り払わねばならなかった彼は、見方を変えれば、一種の悪循環ともいえる旧式の資金入手の方法で自滅したといえる。つまり、事業の拡大のためには、たとえローンの返済中でも、銀行から多額の借金をする、という、かつて先祖が取った方法は、現代では通用しなかったわけである。

事実、Davidの外見は、かつて、オーストラリアの森林にいた開拓者 (bushman) に似ていた。

David Wright looks every bit a bushman—meaty hands and arms, a barrel chest, a stockman's stiff-legged gait and a ruddy, Hemingway-like face with a great fleshy nose at its centre. Crow's-feet speak of years spent squinting, against the sun, and his handshake could crush a brick.¹¹⁾

彼の頑健さと野心は、長年にわたる一族の努力と協力とあいまって、さらに事業の拡大へと発展していった。彼が成人する前の1950年代には、彼の一家は、国内でも有数の牧畜業者になっており、所有する土地は、ニューイングランド地方の台地に広がっていた。WallamumbiやJeoglaなどの土地もさることながら、生産する牛肉は、1825年にオーストラリアに初めて導入されたヘレフォード種から作られたV2VやV1Vのものであった。しかし、彼は単なるbushmanではなく、家業の牧畜業の他にも、さまざまな企業や協会の代表をも兼務していたのである。例えば、East West Airlinesの会長、Compass Airlinesの社長、オーストラリア食肉協会の役員、などである。

それに加えて、New Englandという名称が示すように、この地方は、イギリスの古い階級制度を完全には払拭できず、オーストラリア独自の人類平等主義を受け入れない精神風土があった。この地に定住した祖先達は、この台地の冷涼な気候にイギリスの風土を思い起こし、家にイギリス風の名前を付け、イギリスの樹木や花を植え、庭を造った。その土地に関する階級意識は、次世代にも引き継がれるようになり、外部の者を気楽に受け入れられないような雰囲気もあった。このことは、そこで育ったJudith自身が自伝で認めていることである。Davidが経済的な苦境に陥っているという、うわさが流れ始めた頃、人々の同情があまり寄せられなかったのは、一つにはこの事情がある。また、記事によれば、Davidの取引のやり方の非情さも同情の余地がなかった理由とされる。そして、Judithの実の弟のBruceとの間で、財産と事業を分割した後、Davidの事業熱はますます高まり、ANZ Bankからの融資を受けて、事業を拡大していった。彼の資産は、1985年までには、いわゆる'dynasty'の直系ともいべきものになっていた。土地は、ニューイングランド地方で、14,000ヘクタール以上、家畜は、18,000頭の牛、14,000匹の羊、資産価値は、1,600万ドルから1,800万ドルとされた。ただし、彼のビジネスはコストも高く、ANZ Bankからの借入金は、1980年代の末には1,050万ドルにもなっていた。

その David が失敗した理由は何か。一つには、従来のファミリー・ビジネスのやり方を変えて、全国展開の食肉企業にしようとしたことによる。スーパーの雄、Coles にパッケージされた肉を卸す唯一の会社にするべく、ANZ Bank に十年間にわたる、さらなる融資を依頼したところ、さすがの ANZ Bank も、難色を示した。しかし、ANZ Bank も一年の融資の保証は認め、David は、その担保として、Wallamumbi を含む所有地をあてたのである。第二に、1991年、世界規模で起こった経済的不景気に加えて、この地方に干ばつが襲ったことが挙げられる。第三に、同年、ANZ Bank は、新しいローンのチェック・システムを導入し、Wright family へのローンを止める報告書が作成された。当時、一家の口座の管理をしていたのは、ちょうどニューヨークから帰ってきていた25才のキャリア行員で、地方的なローンのやり方には慣れていなかった。彼は、David のビジネスが毎年100万ドルずつ赤字が出ていることを指摘し、なおかつ、David の投資やビジネス・プランが突然変更されることに懸念を示した。David の方は、ANZ Bank の対応が突然変更されたことに不満を持ち、その結果、ANZ Bank と David の争いは、裁判所に持ち込まれたのである。

一方、David の兄の息子である甥の Rick も、事業の拡大に伴う借入金の返済、資産価値の低落、干ばつの悪影響、などで、やはり、生まれ育った土地である Jeogla を去る運命にあった。Rick は、彼の祖先達の日記や記録を読みつつ、牧畜業の何たるかを学んだ。彼の両親も Jeogla の地に永眠している。ANZ Bank は、1998年8月、破産した Rick に対して、許可なしにこの区域に入ることを禁じたのである。同年10月、ANZ Bank は、ニューサウスウェールズ州とクィーンズランド州の彼の所有地と由緒ある肉牛 V1V の売却を敢行した。

1991年末に始まった干ばつは数年間続いた。オーストラリアは、海岸線に沿うように緑あふれる地域が見られるが、内陸部の乾燥はこの上なく厳しい。そして、時折、干ばつの年がやってくる。Judith Wright も、この厳しい干ばつと人間との戦いを、詩のテーマにしている。

This is my world that dies with me,
cries the curlew in the night.
I have forgotten how the white
birdfooted water in the creek
used in spring to call and speak.
All is fallen under the sun
and the world die that once I made.¹²⁾

生命の源泉ともいえる水がないことが与える恐怖は、自然の死とともに、人間の世界そのものの危機を意味する。恵みとしての太陽が、その干ばつの被害を増大し、人間が造り上げた世界はその下で崩壊していく。

Wright 家の崩壊も、さらに、その悲劇の度を加速していった。*Good Weekend* の記事によれば、

David の妻, Margaret は, この裁判が始まる前年, 癌で死去した。彼は, Wallamumbi に留まって, 裁判の情勢が好転するのを待っていたが, ANZ Bank は, 6月に牛や羊などを売却し始めた。まさしくその同じ週に, 「Wright 家の歴史の年代記を綴ってきた者」(chronicler of the Wright family history), Judith Wright も死去する。7月始め, David は残った物をまとめて, 再び帰って来ることは望みえない, この家を去った。記事は, David の胸中を推しはかりながら, 以下のようになっている。

The homestead at Wallamumbi faces eastward, across a pond, towards the distant mountains and the coast. In his final days there, Wright would surely have noticed how green and healthy the New England grazing lands look, now that the drought is over.¹³⁾

IV. 終わりに

終わりに, 筆者が Judith Wright 関連の場所を訪れた時のことを, さらに記しておこうと思う。知人が留学していた New England University は, Judith Wright の父 Phillip が chancellor をしていた大学であるが, キャンパスには, Wright という名前が冠された場所が散見された。クリスマス休暇で, それらの建物の内部に入ることができなかったが, この地方において, Wright 家が果たした役割がいかなるものだったかが偲ばれる。

次に, 詩人が育った家, つまり, Wallamumbi の中にある家を, 知人夫妻と共に筆者が訪れた時, 現在住んでいる人達は, 親切にも我々を家の中に招き入れてくれた。Judith が過ごした当時の部屋はまだ残っており, 家人達は, Judith Wright の祖母が車椅子で部屋に入るためにけずられた個所などを示してくれた。部屋の中では, 真夏のクリスマス・ツリーが暖かい雰囲気醸しだしていたのが印象的であった。家の前は, 水辺に面しており, ボートに乗ったり, 馬に乗ったりして, 数人の大人達がゆったり過ごしていた。オーストラリアの田舎では, 広大な土地に住むことができるので, 所有地の門から, 家の玄関まではかなりの距離があり, そのアプローチを車で去る時, 乾燥した土ぼこりが舞った。道路に戻ろうとして, 出るべき道を間違えて違う方向に行った時, Wright 家の由緒ある肉牛の名前, V2V を示した標識が目に入った。しかし, 牛は一頭もいなかった。

そして, Thalgarrah Station や Jeogla へも, 知人の車で訪れたが, 広大な牧草地には, 牛も羊もいなかった。牧畜用にさまざまな施設の建物があったが, 全ての作業は停止したままのように見えた。また, 近くに家があったので, 声をかけたが, 誰もいないようであった。

そして, キャンペラにいる, Judith Wright の娘の Meredith とも, 電話で話をする事ができた。Judith Wright の最期の様子について質問した時, 一言, 静かな最期だったとの返事が返ってきた。

一人の人生というドラマや人間達の愛憎劇が終わり、役者は舞台を去って行った。そして、我々の手元には、Judith Wright の詩集、オーストラリアそのものを愛し、世界と人生をオーストラリア人の視点で描き続けた一人の女性のメッセージが残されている。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、オーストラリアでさまざまな便宜をはかって下さった手塚山学院大学の岡村徹先生御夫妻、及びマッコリー大学の Ms. Junghee Chang に心より御礼申し上げます。

Notes

- 1) Obituary, "White woman, black soul," *The Sydney Morning Herald* 26 June 2000.
- 2) *Loc. cit.*
- 3) *Loc. cit.*
- 4) *Loc. cit.*
- 5) *Loc. cit.*
- 6) Judith Wright, *Collected Poems*(Angus & Robertson, 1994), p.116.
- 7) Greg Roberts, "In death, parted lovers reunite: Wright and her dear philosopher," *The Sydney Morning Herald* 16 Sept. 2000.
- 8) Judith Wright, *op. cit.*, p. 209.
- 9) Greg Roberts, *op. cit.*
- 10) Richard Guilliat, "Fall of a dynasty," *Good Weekend* 15 July 2000: 16.
- 11) *Ibid.*: 17.
- 12) Judith Wright, *op. cit.*, p. 108.
- 13) Richard Guilliat, *op. cit.*

Bibliography

- 1) Bennett, Tony et. al. eds. *Celebrating the Nation: A Critical Study of Australia's Bicentenary*, St. Leonards: Allen & Unwin, 1992.
- 2) Brady, Veronica. *South of My Days: A Biography of Judith Wright*, Auckland: Angus & Robertson, 1994.
- 3) Cathcart, Michael. *Manning Clark's History of Australia*, Melbourne: Melbourne University Press, 1993.
- 4) N. グリーブ他編, 加藤愛子訳。『フェミニズムとオーストラリア』, 東京: 勁草書房, 1986.
- 5) Hampton, Susan & Kate Llewellyn eds. *The Penguin Book of Australian Women Poets*,

- Ringwood: Penguin Books Australia, 1986.
- 6) Hergenhan, Laurie ed. *The Penguin New Literary History of Australia*, Ringwood: Penguin Books Australia, 1988.
 - 7) Isaacs, Jeniffer. *Pioneer Women of the Bush and Outback*, Smithfield: Gary Allen, 1990.
 - 8) 石橋百代。『オーストラリアの女性』, 東京: ドメス出版, 1997。
 - 9) Lever, Susan ed. *The Oxford Book of Australian Women's Verse*, Melbourne: OUP, 1995.
 - 10) J. マーチン著, 古沢みよ訳。『オーストラリアの移民政策』, 東京: 勁草書房, 1987。
 - 11) Page, Geoff. *A Reader's Guide to Contemporary Australian Poetry*, St. Lucia: University of Queensland Press, 1995.
 - 12) Row, Noel. *Modern Australian Poets*, Sydney: OUP, 1994.
 - 13) G. シェリントン著, 加茂恵津子訳。『オーストラリアの移民』, 東京: 勁草書房, 1985。
 - 14) Strauss, Jennifer. *The Oxford Book of Australian Love Poems*, Melbourne: OUP, 1993.
 - 15) Tranter, John & Philip Mead eds. *The Penguin Book of Modern Australian Poetry*, Ringwood: Penguin Books Australia, 1991.
 - 16) Walker, Shirley. *Flame and Shadow: A Study of Judith Wright's Poetry*, St. Lucia: University of Queensland Press, 1991.
 - 17) Wilde, William, et. al. eds. *The Oxford Companion to Australian Literature*, 2nd edition, Oxford: OUP, 1994.
 - 18) Wright, Judith. *Collected Poems 1942-1985*, Auckland: Angus & Robertson, 1994.
 - 19) Wright, Judith. *half a lifetime*, Melbourne: The text Publishing Company, 2000.
 - 20) Wright, Judith. *The Cry for the Dead*, Melbourne: OUP, 1981.
 - 21) Wright, Judith. *The Generations of Men*, Melbourne: OUP, 1959.



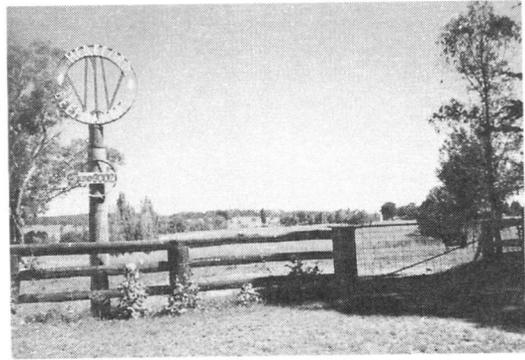
New England University の一角



Wallamumbi; Judith の育った家の前で



Wallamumbi の地所の標識の前で



VIV の標識が立つ牧場の前で



Thalgarrah の地所の前で



Judith の義妹, Mrs. Jane Wright